

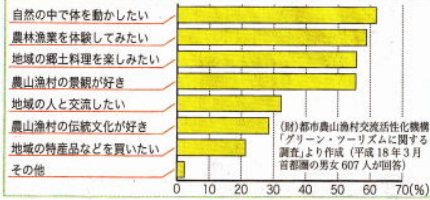
郷土料理と「農村浴」楽しむ

農作業を行う農家の人々や、集落で生きる家畜の姿。農山村の飾らぬ日常生活に触れ、生産地の豊かな食文化が楽しめるグリーンツーリズム。その中核である農家民宿や民泊は着実に増加しており、都市住民に一つのライフスタイルを提案し、これからの観光の大きな柱になると期待されている。

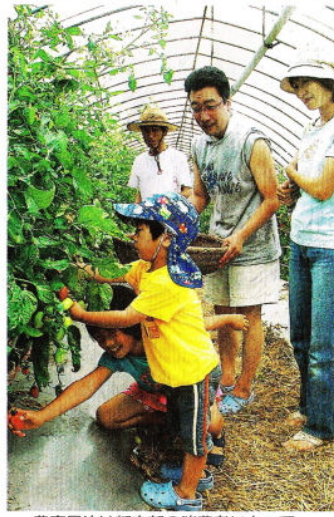
(峰松清子)

「野菜嫌いの裕介お 隆公にさん(五)が、長男いしそにナスを食べた 裕介ちゃん(三)の『武勇人です』。福岡市の亀井 伝を愉快そうに披露した。

あなたが農山漁村に行ってみたのはどのような理由からですか



亀井さん一家が滞在するのは、南小国町の農業佐藤幸治さん(六)と妻の法子さん(六)が九三年から営む民宿とキャンプ場の「吉原さんべえ村」。料金は一泊二千六百二十五円〜六千三百円。一家は、佐藤さんの畑で夕食用の野菜を収穫。「赤くてきれい」。初めて体験につれ



農家民泊は都市部の消費者にとって、生産現場である農村を肌で感じる貴重な場になっている＝南小国町

グリーンツーリズムの中核 農家民宿

食の力

しそうな長女の春花さん(六)が取れたトマトをほお振った。築百三十年の牛小屋を改装した民泊屋や五右衛門風呂、水田のアイガモなど農山村の光景に興味津々の様子で、家族の会話も弾む。

「自分たちで収穫したものを食べられると聞き、初めて利用しました。明日はまでご飯を炊いてみたい」と、妻の麻子さん(三)。

内閣府が〇五年に全国三千人に行った世論調査によると、グリーンツーリズムに代表される「都市と農山漁村の共生・対流」については、「知っている」人は約三割だった。しかし全体の約八割が「必要」と感じ、約三割は「実践したい」と考えている。

小国町「九州ツーリズム大学」運営の「学びやの里」 嵩和雄研究員は、「グリーンツーリズムは単なる観光ではなく、農山村の暮らしを魅力あるライフスタイルとして都市部の人々に示すもの」と強調する。「農家の副収入や生きがい、地域に対する誇り、農地の維持にもつながります」

佐藤さん夫婦も、民宿は「価値ある農家の仕事」と胸を張る。



郷土料理と「農村を楽しむ農村浴」(法子)を喜び、宿泊者の姿が励みだといふ。

食農リーダー

農家に泊まる農家民泊が、観光と地域活性化の新しい手法として注目されている。

なかでも素晴らしいのが長野県飯田市の取り組みだ。農家四百五十戸がまとまり、宿泊を受け入れている。特に興味深いのが中学校の修学旅行の誘致だ。農家と旅館に一泊ずつ泊まるのだが、昨年だけでも百十六校が合計二万二千泊、宿泊料金は一泊六千五百円、経済効果は八億円にもなるだろうという。

そして単に農家に泊まるだけでなく、体験学習がセットになっている。体験は約千五百円。体験は地域でできることがメニュー化されていて、農作業をはじめ、そば打ちや五平もち作り、ラフティング、乗馬、溪流釣り、草木染めなど。毎年少しずつ増え、現在は百六十三ものメニューがある。今田平地区という三十八戸の集落では、地区の田んぼすべてが修学旅行の生徒によって手植えで行われている。

体験学習は、農家や一般市民のインストラクターが千人も登録して指導をしている。時給は千円だ。

同市の農家民泊は、もともと

「このような農山漁村民宿(ツーリズム)は、『安宿は〇五年に全国で約三千七百軒、宿泊者は年千七百軒、地域で付加価値をつけたる市場に転換されている(農林水産省調べ)。農産物経営や維持につながる。そのためにグリーンツーリズムの推進が必要だ」と話している。

(月一回掲載)

は千葉県から先生に引率されてきた生徒が、農業体験に感動したことから、それを宿泊にまでできないかと先生に相談されたことが始まりました。翌年、冷害のため中山間地で農業の収入が途絶えたことから、生徒の体験と宿泊が検討され、一九九六年に市のパッケージで数件の農家が始めました。

現在、運営は市町村、JA、地元旅行会社が出資した「南信州観光公社」が行っている。その中でも農家に宿泊して観光をするという「グリーンツーリズム」は、ヨーロッパで農村の経済活性化策の一つとして始まった。イタリアで農家民泊したことがあるが、ホテル並みの立派な設備に驚いたものだ。ベッドとシャワールームがある個室の鍵を渡されたので自由に出入りでき、とても快適だった。農家民泊を拠点とした長期の旅行がすっかり定着している。

修学旅行も誘致…地域活性化

飯田市の農家民泊は日本独自のものです。普通の農家の一室に四人単位で泊まる形をとっている。囲炉裏を囲んで農家と語り、一緒に郷土料理を作って食べる。農村の普通の暮らしに触れることが宿泊客の喜びにもなっている。

(食環境ジャーナリスト)